

◎野木京子

今月もよい詩が多いです。刺激を受けつつ、楽しみつつ、皆さんに併走し続けています。

特に心に残った作品を以下に。

枝を拾って名前を書く

刺すための形をしている

藤色

*愛情と憎しみが波のように寄せては返す。二行目を読んでどきりとする。“刺すための形、をしているのであって、刺す道具ではない。”形、という一文字に、断念も隠れているようだ。

心が折れる音を聞いた

なかなかでかい音だった

加藤 美紀

*ユーモラスな感じもあるけれど、心が折れる実感がともなっていて、かなり痛い。したたかに打ちのめされたあと、ひとりで苦笑している映像が見えるようだ。

あの朝も

こんな

晴れやかだったのか

三輪車に乗る少年

ひとり

はすた

*8月6日の投稿。広島平和記念館で三輪車の展示を見たことがある。三歳だったその子は、被爆し、全身にやけどを負い、その夜亡くなった。三輪車に乗る小さな子を「少年」と呼ぶのは、自己の投影でもあるからだろう。

道端の死をそっと跨ぐ季節

伊丹真

*あちこちに転がっているセミの死体を、人々は無造作に、あるいはおずおずと跨ぎ越す。セミの死体という小さな存在から、「死」という大きな概念につなげた。

夏期講習

行きと帰りで

小麦色

桜咲

*海やプールで楽しく遊んだかのような小麦色の肌。猛暑で、大変だった行きと帰り。ユーモラスでありながら、ちょっとほろ苦くて淋しく、でもこれも夏の良い思い出で、ほんのりした気持ちになる。

夢の引き出しを

閉め忘れていたみたい

枕に頭を乗せただけで

夢が溢れ出た

板倉萌

*夢は、寝ていないときはいったいどこに隠れているのだろう。脳の奥に秘密の引き出しがあって、そこに隠れているのだろうか。飛び出すタイミングをねらって、夢はいつも引き出しのなかで、うずうずしている。

カムパネルラが

川に流された夜の

橋を踏む大勢の足音が

耳に残ってる気がする

春町 美月

*宮沢賢治『銀河鉄道の夜』は最初から最後までどこも印象的だが、カムパネルラが溺死したらしい最後の場面も、心に刺さる。生と死の境界を渡る橋の上で、ジョバンニが走る足音も響いている。

蝉しぐれ今日も明日も蝉しぐれ

おなじものなどなにもないのに

金澤 春葉

* といえばそうだな、と読者は発見する。蝉しぐれは、昨日も、去年も、まったく同じに聞こえた。でも、去年のセミはずいぶん前に死んでいるし、昨日のセミだってもう死んでいるかもしれない。同じに思えても、わたしたちは変化のただなかにいる。

透明な

一本の樹になりたいよ

いつか

ふたたび

空へ還ると

佐藤 美貴子

* 大きな樹木は、地下世界から、地表を通り、空へと幹を伸ばしている。透明な樹木は、境界を越え、時間も越えて存在している。人間も、未生から生まれ出て、現世を過ぎて、やがて天上世界へ返っていく。人間だって境界を越え、時間を超えていく。

後ろ向きねと言われましても

僕の手はどうしたって前に

ついているわけでした

佐々木佑輔

* 誰の言葉だったっけ。ボートを漕ぐとき、前に進むためには後ろを向かなければならない、と。だから後ろ向きはそれほど悪くはない。じりじり遅い歩みであっても、少しずつ確実に前に進んでいる。